

大阪府立布施北高等学校学校運営協議会議事録

校名	大阪府立布施北高等学校
校長名	富本 佳照

開催日時	令和 7 年6月 28 日(金) 9:30～11:00
開催場所	大阪府立布施北高等学校 1 棟2F A205 教室(旧展1教室)
出席者(委員)	松下 寛史(会長)、藤田 剛 (副会長)、菊地 栄治(委員)、棟久 香澄(委員)
欠席者(委員)	
出席者(学校)	校長、事務長、教頭2名、首席2名
協議資料	① 次第 ② R7 実施要項 ③ 府立高校改革グランドデザイン ④ 布施北の状況(R07) ⑤ R6学校経営計画 ⑥ R7学校経営計画

議題等(次第順)
(1) 開会・校長挨拶 (2) 出席者の紹介 (3) 大阪府における府立高等学校教育の方向性について (府立高校改革グランドデザイン) (4) 布施北高校の状況について (ア) 概況報告(資料:布施北の状況) (イ) 令和 7 年度当初の状況 (ウ) 新しい事業について(姉妹校交流事業・働き方改革 伴走型支援事業) (5) 学校経営計画について(令和6年度・令和7年度) (6) その他
協議内容・承認事項等(意見の概要)
(1) 開会 校長挨拶 (2) 出席者の紹介 (3) 大阪府における府立高等学校教育の方向性について ○ 府立高校改革グランドデザインの説明 《学校より》 ・大阪の教育の方向性は大阪府教育振興基本計画で10年ごとに定められる。新しい第二次大阪府教育振興基本計画が昨年度から始まり、現在、その前期事業計画(5年)の2年め。 ・昨年8月の学校教育審議会での新しい振興基本計画を踏まえて府立高校改革の方向性と入学者選抜制度のあり方について答申があり、その内容を受けて、教育庁が3月に取りまとめたのがこの「府立高校改革グランドデザイン」。今後の府立高校のすべての取組みは、ここに示された現状認識と改革の方向性に沿って進められていくことになる。 ・現在、布施北を含む、エンパワメントスクールは、「多様なニーズに応える学び」を支える一角に位置付けられている。総合学科高校の中の一つのバリエーションで、基礎学力の定着やエンパワメントタイムで答えのない問いについて考え、社会人基礎力を養成するとともに、キャリア教育を推進、SC・SSW・CC などを手厚く配置してきた。

- 教育をめぐる環境が様々な面で大きく変化している。
- 後期中等教育(高校等)への進学率が100%に近づくとともに、いわゆる昼間に毎日学校に通う、という学習形態以外への進学が増えている。中学校からすぐ通信制の高校へ進学する生徒が増えてきた。
- 不登校の生徒、日本語指導が必要な生徒、障がい等により配慮が必要な生徒が増えている。
- 定時制高校がこれらの生徒を受け入れることが増え、定時制高校の役割が変わってきた。
- これらを踏まえて、グランドデザインは改革の方向性について「卓越性・公平性・多様性の実現」・「さらなる魅力化・特色化」・「わかりやすさ」を掲げ、3つの改革を行う、としている。
- 少子化と私学無償化の影響で、府立高校の定員割れの状況についてはご存じの通り。各府立高校の魅力化・特色化を進めながら、それぞれがどんな学校か中学生に分かりやすく広報していくことを求めている。
- 本校は、すでに進めてきた取組みにこれらを取組みしたものも多くあり、このデザインが出たからと何かを大きく変えなければならない、というものではない。現在模索しながら進めている多様なニーズに対応した学びの保障を引き続きしっかり進め、それを中学校や府民に示していくことが大切だと考えている。
- 少子化により高校生になる子どもがどんどん減っている。この試算の通り、10年後には250クラスほどが減となる。高校を卒業する生徒が減ということは、今後の日本の産業を支える若者がそれだけ減ることであり、学校だけの問題ではない。

《委員より》

- 不登校の生徒が増えているということについては、小中学校で不登校になり、学校に通いたなくなる状態になっているのであれば、そもそも学校教育がどうなっているのか、と思う。まず府はこの小中学校の現状についてどう考えているのか聞いてみたい。
- 少子化で入学する生徒が減っていくのは、僕たちの会社にしても新入社員の応募が減っていくことになるので同じことだと言える。今後は会社として外国籍の生徒、多文化生を受け入れていかなければ回らないだろう。この学校の現状に何とか会社として手伝いたい、会社がすることは、学校の特色づくりに貢献するというので、デュアル実習を受け入れていくことだと思っている。
- 学校の特色を考える中で、この学校にあって、他の学校にないものは何なのか。もしくは、この地域が他の地域と何が違うのかを考えた時に、東大阪という町全体が「学校」のようになっているこの現状を、地域とともに宣伝できないかと思う。

(4)布施北高校の状況について

(ア) 概況報告(資料:布施北の状況)

(イ) 令和7年度当初の状況

(ウ) 新しい事業について(姉妹校交流事業・働き方改革伴走型支援事業)

《学校より》

○ 学校の状況について

- 本来、帰国生選抜の定員は16名であるが、一般選抜で定員割れした学校は、定員までの余裕に応じて日本語指導の必要な生徒を受け入れる仕組みになっている。その結果、今年の1年生として日本語指導が必要な多文化生が約30名入学した。
- 多くの府立高校が定員割れしていることもあって、梓校(日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学者選抜実施校)以外にも日本語指導が必要な多文化生が散在して在籍する状況が強まっている。
- グランドデザインにおいて、梓校は「サポート校」として少数散在在校への支援を期待されており、これまでにない多くの多文化生にどのように教育を進めていったらいいか困っている状況に、さらにミッションが上乗せされる恐れに直面している。
- 支援教育については、支援学校がサポート校として各地区の小中学校や高等学校を支援する体制が以前からあり、日本語指導にかかる支援もそれに倣ってできているものと思われるが、状況や人的な配置等、全く違うので、そうは単純にいかない。
- グランドデザインにもある通り、最近では中学校で支援学級に在籍していた生徒や支援学校中等部の生徒

が府立高校に進学するケースが増大しており、本校においても個別の教育支援計画を立てる生徒や療育手帳を所持している生徒が大幅に増える傾向にある。

- 国際的には、障がいのある児童生徒とともに学ぶ「インクルーシブ教育」がめざすべき教育環境とされており、日本は条約を批准しながら、別の環境である支援学校で障がいのある生徒の教育を行う割合が高すぎる、という指摘をかなり強く受けている現状で、高等学校においても、合理的配慮の実施とともに、インクルーシブ教育に対しても、取り組んでいかなければならない状況にある。
- これを進めるには、本来は国レベルで、高校に人的配置や施設面での支援がもっと必要である。
- 今後は、一定の割合を占めている、これらの生徒が理解できる授業をしていかなければならない。
- 学校として授業や評価のあり方を変えていかなければならない時期に来ている。早くから重点配置されている SC や SSW をはじめ、専門職の方々と「チーム学校」としての対応も必要である。外部の機関とも連携して進めていかなければならない。
- 今年から、SSW の配置方法が「拠点校方式」に変わった。本校は「拠点校」として多い時には週3日 SSW がいる状況になった。積極的に連携を図っている。

○ 姉妹校交流事業

- 昨年末の総合教育会議で急に出てきた新しい事業。英語教育充実事業の一環として、全府立高校が海外の姉妹校と提携するとともに、全府立高校がその姉妹校に交流渡航するもの。
- 本校は、たまたま昨年度、韓国のデイル観光高校と姉妹校協定を結んだところであったため、さっそく事業を実施する方向で準備をしている。
- 生徒と引率教員の渡航費用について、資料の通り府から出ることになっている。1・2年生を対象に、2 学期のはじめには校内で周知して参加募集を行う予定。

○ 働き方改革 伴走型支援事業

- 時間外在校等時間の多い高校を中心に、働き方改革のさらなる進展を図ろうと、府がコンサルタントに委託して行う新事業。
- コンサルタント事業者からファシリテーターが来校して、全職員による学校の業務に関する考えを出し合う「キックオフミーティング」を実施した。
- 先生方が本校の学校運営や業務について思っていることを出し合う機会になった。
- いいかも、と思うことを試行して、うまくいかなければやめる、というスタンスで、校内の取組みの改善に取り組むように、とのアドバイス。検討して、早めに何か取り組めたらと考えている。

《委員より》

- 多文化生や障がい等により配慮が必要な生徒と、ともに学び合う関係はとても大事である。
- まずわれわれは目の前にある問題に対応していかなければいけない。同時に、学校だけでなく、しかるべき立場の人がしかるべきことをしていっていただければならないですね。
- 先生方が、目の前の問題を解決しようと思って頑張っている学校は大丈夫。
- 特性のある生徒の就職やデュアル実習についても、遠慮しないでもっと相談もしてみてもどうか。
- 企業は障がいや特性がある従業員について就労支援施設に相談する。様々なノウハウを持っているので、学校からも相談してサポートをしてもらったらどうか。
- 昨今は学校に求めるものが多すぎる。「ニーズ」という言葉を、さも自然発生的で、不可避のもののように文科省をはじめとする行政側は使うが、実は不登校をはじめとする、現在学校現場に降りかかっている「ニーズ」の多くは、教育に必要な予算を十分に配当せず、本来必要な数の教員を配置しなかったり、教員の良心につけこんで本来の業務ではない仕事を次々と学校現場に行わせたりした結果、教員が生徒にしっかり向き合う環境が失われ、子どもたちが本来学校で受けられたはずのケアや支援を受けられなかったために生じたともいえる。そういう自分たちの側の問題を反省することなく、次々と学校現場に対応の丸投げを続けている状況は非常に大きな問題だと言わざるを得ない。現場の先生方は言われなくても、目の前で起こる問題や「ニーズ」に常に必死で対応し、模索している。学校側は、言われるがままに課されたことを受けるのではなく、時には、「無理だ」とはねつけなければならないのではないか、と思うことがある。

- 資料の上で退学者の推移については追うことができるが、転学者も比較的多くいると思う。転学者が転学後にどうなったかも気になっている。もし、転学後の状況を追えるようであれば、知りたい。

(5)学校経営計画について(令和6年度・令和7年度)

- 昨年度の第 3 回で確認していただいているが、実績について年度末の数字に更新しているのでご確認ください。

(6)その他

- 令和7年度使用教科用図書の採択について
 - 図書を実際に見ていただき、ご承認いただいた。

次回の会議日程

日 時	令和7年 11 月頃を予定（授業見学含む）
会 場	大阪府立布施北高等学校